

額の傷

私の額には、ちょうどその真中どころに、長さ一吋弱の相当深い傷跡が、左右に走っている。子供のときには、それが余程深かったとみえて、随分気を揉んだ記憶がある。写真を撮っても、その傷跡が鮮明にと謂わぬまでもいつも痕跡を止めていたものであるが、成長するにつれて余り目立たなくなつて来た。

それは私が三、四歳の頃のことであるが（私は一九一〇年生れである）、この傷を受けた場面だけは不思議にもよく覚えてゐる。当時私の家におしげという女中がいた。他に男の雇人が一人いて、これが相当大食漢であつて、随分長く勤めてくれたが、その人についてはこれといつて大した思い出はない。その女中が私を背負つて門の前の田の端で遊んでいた。ところが何のはずみか、私を背負つた儘向き直つた瞬間に、私の額を田を囲む石疊の角にぶつつけてしまった。私の額からは鮮血が淋漓とほとばしり出たものである。ちょうど野良仕事から帰りかけ

の母が、狂いそうな顔付きで、私を抱えて家の中に運びこみ、お灸の草か何かで応急の手当をしてくれた。

おしげさんは、その後二、三年は私の家で働いてくれたが、やがて村はずれの小さい旗亭の酌婦になった。それでも度々、私を連れに来てくれたので、私はしょっちゅうその旗亭に招かれざる客となっていた。それから暫くして、おしげさんは病んで死んでしまった。

これが私が生れ落ちてからの最初の淡い思い出である。その旗亭は、昔ながらの藪に囲まれて、昔のままの姿で残っている。この淡い思い出が、私にとっては、年月を経るに従って、益々濃くなって行くような気がする。その旗亭は、村はずれの三叉路の脇にあるが、そこを通る度毎に、私はおしげさん呼び止められそうな気がするのである。

副 業 地 獄

私の長姉は、私が六歳の冬、一里ほど離れた村に嫁いだ。姉の年はたしか十六歳であったと思ふ。名前をてつといった。その姉の嫁ぐ日は冬の寒い日であったが、箆笥や長持をかっいで

行く一連の行列が、私の村はずれの長い坂をいくつもの提灯を提げてゆっくり上って行くのであった。私は、この行列に参加したくてたまらなかつたと見えて、その跡をどこまでも追っかけた。本家の従兄が、執拗に行列を追いかけ私を抑えて引返してくれたが、私は尚も頑強に抵抗したことを覚えてゐる。

その姉は、間もなく、二人の幼児を残して死んだ。無口な優しい姉であつた。又よく働いた姉であつた。当時私の田舎の農家にとつて、一番大きい副業は、麦稗真田を編むことであつた。裸麦の茎（これを藁といつた）を節のところをさけて五、六寸の長さに切断して、これを硫黄で蒸して脱色したものを、一分程度の幅に裂いて、色々の形に編むのであつた。小さく裂かないで筒のまま編んで行く高等な編み方もあつた。一番簡単なもので一反（二十六間）が二十四、五錢程度のものであつたが、一生懸命に編んで充分一日の労力がかつた。私なども、六、七歳の頃からこの麦稗真田の編み方を覚えさせられて、休日以外は毎日のように、ちよつばをあてがわれて編んだものだ。ちよつばといふのは、一日中その人に父又は母から割当てられる仕事の分量のことをいふのである。このちよつばをいただいている許りに、私は予習はおるか学校の先生から言付けられている宿題をも、十分果す暇もない程であつた。日暮れまで魚釣りや

球技けに興じて、このちよ、うばを完遂できなかった時には、母の前に出ることが恰も罪人が検事の前に出るように辛かったことを覚えてる。

私の姉の死因は腎臓病だったと言われている。真田を編むことに熱中して或は割当てられ、又は計画した仕事の分量を何とかして仕上げなければならぬという異常な義務意識をもっていたので、つい小便に立つ時間も節約して編み続けたことが、その一因ではなかったかと思われる。

近頃私は、仕事の関係でよく田舎に帰るが、真田を編むという副業が、かます吠を織るといふ仕事に代替されていることも手伝ってか、子供が仕事をしているのを見る機会が乏しくなってきた。子供が多いということは、村々を歩いてみて、つくづく考えさせられることであるが、それは外に在って子供が遊びたわむれているせいかも知れない。

私の生家の周辺の農家では、朝の五時頃から、吠を織る機の音が聞えてくる。氣候のよい時であればよいが、寒い冬の朝などは、並大抵のことではあるまい。特に女の人にとっては苦しい仕事に違いない。貨幣経済と缺状価格差の中にあつて、農家は、今でも副業に追われ責められているのである。

小 銭 を 惜 し む

小学校に入学する日のことであつた。私は茶色の立縞のはいつた絹の着物を着せられた。正にこれは私の唯一の、一張羅の礼服であつた。ところが家を出て間もなく近所のドブの中に、転げこんで、この一張羅の礼服を泥まみれにしてしまった。その後で、私はどういつ着物を着て学校に出かけたかは、不思議にも思い出せない。

中学校に入つて夏の霜降りの制服をつくるまで、私はずっと着物を着て通学した。尤も中学校に入つてからは毎日袴をつけていたが、着物といつても、もとより、ありあわせのもので、小学校の低学年の時は、その胸襟のあたりには、飲食物がくつついたり、時には、鼻くそをすりつけたりして、ピカピカと異様な光りを放つていたものだ。久留米がすりというのが、当時の男の子供にとっては、一番立派な着物であり、子供心に久留米がすりを着ている子供に対しては、淡い羨望を覚えたものだ。私の村で、しよ、つち、ゆ、う（祭典とか正月ばかりでなく）久留米がすりを着ている金持の子供が二、三人はいた。その子を人はボン、サンと呼んでいた。中農

の倅である私などは、勿論ボ、ン、サ、ンの仲間には入っていません。

私は小学校を卒業するまでは、理髪屋に行つたことがなかった。頭髪がのびてくると、父が母が、カミソリで文字通り坊主のように青々と剃り落としてくれた。当時の散髪代は十銭であったが、父母はその金を節約する積りでいたわけである。中学校に入ってから漸く、私の請を容れて、理髪屋にやつてくれた。中学校を了えて、都会に進学するまで、私はその理髪屋の厄介になつてはいたが、理髪屋の技術が高等のものであり、教養も豊かであればいけないのだという、職業上の誇りを、その理髪屋さんから繰返し聞かされたものである。

中学校の入学式の日のことである。父が私を連れて入学式に参列してくれた。学校の校庭には、靴屋、カバン屋、洋服屋、文房具屋等が、夫々屋台を臨時に設けて、新入生の購買慾をそそいでいた。私は人並に、何よりも革靴が欲しかった。正札を見ると六円と書いてある。その屋台の附近を去りやらず徘徊しつゝ、到々父に革靴を買ってくれとせがんだ。父は、ゴム靴で間に合つてはないか、といつてどうしても買ってくれなかつた。屋台に陳列された革靴が、手の届かない片思いの恋人のように、恋しくもあり且つにくくもあつたのである。当時はいていたゴム靴の命脈がつかたその年の夏、私は漸く待望の革靴を手に入れることができたのである。

私は、貧乏なくせに、余程見栄坊であつたらしい。新しく買入れた靴に、誰も注目してくれないので、態々ギクギクと音を立ててみたり、妙に大股に歩いてみたりして、人々の注意を惹いたりしたものである。その後、どういふ靴をはいたかさだかに思い出せないが、中学時代の晩年は、当時流行の編上靴をはいていたことだけは覚えてゐる。これも流行に投ずるといふだけの心理からではなく、靴下が破れていても、よしまた靴下をはかなくても、それで結構間に合つていふ便宜なものであつたからでもある。